

## 「名人芸」からの脱却を

— 総特集「地域研究方法論」を読んでは

木村 幹

率直に書こう。最初に本特集を読んで感じたのは違和感である。確かに、特集の意図はよくわかる。今日、地域研究はさまざまな危機に直面している。進行するグローバル化は主として国民国家のそれを基盤とする「地域」の枠組みを相対化させ、各々のデシプリンはその研究方法を精緻化させ、さまざまな事象をより精緻かつ明確に分析できるようになっている。

このような状況下、地域研究にもまた「方法論」が必要である、という考えは一定の合理性を持つだろう。しかし、本特集のアプローチは果たして妥当なものだったのだろうか。たとえばこの点について、筆者のもう一つの専門である政治学の立場から考えて見よう。まず政治学とは何よりも多様な「政治現象」を研究対象とする学問であって、「政治学という方法論」によって行われる学問ではな

いことを確認したい。それ故そこに用いられる手法もまた、分析対象の特質により実にさまざまである。歴史学的手法を用いる者もあれば、統計的手法を用いる者、さらには経済学的手法や文化人類学的手法を用いる者もある。もちろん、手法の統一性は、数量的手法がより発達している経済学の場合にはより明確であろう。しかし、それも飽くまで経済学が分析の対象とする経済現象が、社会現象の中で最も数値化が容易な現象であるからに過ぎない。

言い換えるなら研究の手法とは、飽くまで分析対象の性格と、分析の目的によって定まるものである。対して地域研究は、政治学や経済学とは異なり、特定の傾きを持った現象に対してのみならず、地域内部におけるあらゆる現象を視野に収めた学問である。そこで分析の対象となる現象は極多様であり、分析手法も多様とならざるを得ない。

指摘せねばならないのは、研究方法を考える上では、研究者個々の特定の学問分野に対する思い入れや自己認識は如何なる意味も持たないことである。研究の価値は、研究者自身のアイデンティティと無関係に決まるものであり、そこで政治学者であるのか地域研究者なのか、ということは何らの重要性も持っていない。

本特集の諸論文は、この問題について果敢に切り込んでいる。第I部の山本論文「地域研究方法論」はこの地域研究の課題について広範に論じ、また続く、「地域研究 現場の悩み三〇問」では、今日の地域研究が直面する課題が率直に議論されている。引き続き第II部で各地域の専門家が自らの経験から論じた後、第III部では、逆に各々の研究者が自らの立場から詳しく論じている。

しかしながら、それらの分析には明確な限界があるように見える。問題は、これらの多くの論考が「地域研究者」としてのアイデンティティに重きを置きすぎていることである。そこにおいて示された多くも、分析的というよりは叙述的であり、それ故読者、とくに若い研究者にとって、具体的な「地域研究の方法論」を読み取ることが難しくなっている。その例を第III部の論文のいくつから見ていこう。たとえば山本論文は地域研究における「ぼかしどころ」の重要性を主張しているが、これだけでは単なる「名人芸」の提示にしか過ぎない。より具体的な方法論の提示

がなければ読者はこの提案をどのように利用したら良いかわかりにくい。

地域研究における方法論が曖昧な方向に流れがちなのは、理由がある。それは時にこの分野の研究者が、同じく第III部の小森論文も要求するような、「全体像」を求める傾向にあるからである。だが、言うまでもなく、これは無理難題である。しかも多くの場合、この「全体像」は「単に現地のさまざまな事情」以上のことを意味するものとしており、そこには明確な定義すら存在しない。定義さえ明らかでないものを追求しろ、というのは控えめに言っても困難であり、多くの研究者は困惑する他はないであろう。

地域研究者としてのアイデンティティに重きを置き過ぎたことの異なる帰結は、田原論文にも見ることができる。田原が主張するのは、地域の観察からデシプリンにフィードバックできる示唆を獲得することである。同様のことは筆者も主張したことがあり、領首できる場所も多い。しかし、これだけでは「方法論」としては行き当たりばったりのものになってしまうことも重要である。何故なら、これだけでは、地域に入って普遍的な問題が発見できるかは地域の特性と研究者の「センス」によって偶然的に決まるものでしかなく、その成功何如は「時の運」になってしまうからである。

こうして見た時、本特集の問題は、その提言の多くが研究者個々の「名人芸」に依拠するものとなっており、具体性を欠いていることにあるように思われる。「全体性」の重要性も、「地域からのディシプリンに還元できる普遍的示唆を獲得すること」も兼ねてより言われていることであり、問題はそれが如何にすれば可能か、ということである。闇雲に「現地に行け、そして考えろ」というだけでは、限界があるのは明らかである。

このような本特集の問題は、地域研究者の比較優位が一体何か、という視点が欠けていることに由来しているように思われる。たとえば本特集第一部の山本論文が主張するように、将来の地域研究がディシプリンを「鍛え上げる」ためのものであるとするならば、ある特定の問題の分析を巡って、地域研究者は、ディシプリンに足場を持つ者と競争することを余儀なくされることになる。言い換えるなら、地域研究者が発信すべきは、その内容が、ディシプリンに足場を持つ研究者に対して優位を保てる場合のみであり、それ以外の場合には、敢えて参入する必要はない、ということになる。

この問題を考えるためには、そもその研究という営みが何かから考えてみる必要がある。単純に考えて研究という営みは、五つの研究者自身により選択された要素からなっている。すなわち、問題設定、分析対象、分析方法、

て、現地にて「深い」調査を行うことができることである。つまり地域研究者はこの資源を生かして、ディシプリンに新たな分析対象を提供することができる。ディシプリンとの兼ね合いでどのようなケースを発見できるかは、地域研究者にとっての腕の見せどころであり、そのための試行錯誤は枢要と言わねばならない。

対して、分析方法については、地域研究者が新たに追加できることはおそらくほとんどない。できるとすれば、新たに提示された分析手法の可能性を地域にて試すことであるが、少なくとも人文社会科学分野においては、その機会はそのほど多くない。研究の含意についても同様である。仮に地域研究がディシプリンを鍛え上げるためのものだとするならば、研究の含意は当然、地域研究とディシプリンの双方に共有されるものでなければならぬ。言い換えるなら、この含意は必ず普遍的な内容を含まねばならず、それが地域固有の文脈に縛られることは許されない。

地域研究者がもう一つ固有の優位性を発揮できるのは、聴衆である。現地語を駆使することのできる地域研究者は、他の研究者が持たない現地の聴衆を獲得することができるからだ。現地の聴衆を持つことの意味は、単に聴衆の数が増えるというだけではない。重要なのは、異なる聴衆を得ることにより、研究に対する異なる反応を獲得し、次なる研究にフィードバックできることである。

研究の含意、そしてそれを伝えるべき聴衆である。研究という営みにおいては、この五つの要素を整合的に組み合わせる必要がある、基本的にはより多くの聴衆——この聴衆には一般社会のそれとアカデミズムのその二種類が存在する——のより大きな評価を得た研究が価値のある研究だ、ということになる。

だからこそ、個々の研究者はこれらを選択する過程で自らの比較優位がどこにあり、どのように生かせばより良い研究ができるのか、を常に考えなければならない。では地域研究者は、他の研究者に対して如何なる比較優位を持ち得るのか。この点については先に挙げた研究における五つの要素がヒントになる。第一に問題設定においては、通常我々はそのアイデアを一般社会かアカデミズムかのどちらから得る。このうちアカデミズムについては、グローバル化が進む今日では地域研究者固有の優位性はほとんど存在しないだろう。他方、地域研究者は地域の一般社会から問題設定のアイデアを得ることができる。これを利用して、従来の研究が見逃してきた新たな問題設定ができるなら、地域研究者は他の研究者とは異なる学問的貢献が可能であることになる。

もちろん、地域研究者が最も大きな比較優位を持つのは、分析対象の選択においてである。地域研究者にとっての最大の資源は言語能力をはじめとする固有の資源を用いて、以上の話をまとめてみよう。結局、個々の研究者にとって重要なのは、個々が「よりよき研究」を行うことであり、それがどのような研究分野に属するかは重要ではない。ましてや地域研究がそれによりディシプリンを鍛え上げようとするものであれば、重要なのはディシプリンの側面をフィードバックできるかであり、個々がどの学問分野にアイデンティティを持つかではない。どんなに「地域研究」として良くできていても、それがディシプリンの研究者に理解できず、あるいは彼らに使えなければ、両者のキヤッチボールは成功しない。

もちろん、そのことは地域研究者であることが如何なる意味を持ち得ない、ということの意味しない。結局、地域研究者としては「地域についての多くの知識を持ち、ある程度の深度を持った地域での実地調査を行うことのできる研究者」のことである。だからこそ地域研究者は、自らの優位性と不利性をきちんと認識して、持てる資源を最大限に利用して研究活動を行わねばならない。そのためには常にディシプリンに対する配慮を怠らず、自らの持てる資源でどのようなチャレンジができるかを考えなければならぬ。これをどれだけ意図的に行うことができるのか、それが今後我々が考えていくべき「方法論」だと思っただけだろうか。

●著者紹介●

- ①氏名……木村幹(きむら・かん)。
- ②所属・職名……神戸大学大学院国際協力研究科・教授。
- ③生年・出身地……一九六六年、大阪府。
- ④専門分野・地域……比較政治学、朝鮮半島地域研究。
- ⑤学歴……京都大学大学院法学研究科(比較政治学専攻)博士課程中途退学、博士(法学)。
- ⑥職歴……愛媛大学法文学部助手(一九九三年)、講師(一九九四年)、神戸大学大学院国際協力研究科助教(一九九七年)を経て二〇〇五年より現職。
- ⑦現地滞在経歴……ソウル大学語学研究所(語学留学、一九九二～一九三年)、韓国国際交流財団研究フェロー(一九九六～一九七年)、ハーヴァード大学(一九九八～一九九年)、高麗大学(二〇〇一年)、世宗研究所(二〇〇六年)、オーストラリア国立大学(二〇〇八年)、ワシントン大学(二〇一〇～二〇一一年)、各客員研究員。
- ⑧研究方法……言説分析。歴史的文書、メディア言説、インタビュー等の分析。主として質的分析だが、記述的に統計も使用。
- ⑨所属学会……日本政治学会、現代韓国朝鮮学会、Association for Asian Studies等。
- ⑩研究上の画期……(一九八〇年代より始まる比較的長期の)グローバル化。これにより国内社会のイデオロギーの状況や国際関係が大きく変化した。
- ⑪推薦図書……難しいですが、Alexander L. George (ed.), *Case Studies and Theory Development in the Social Sciences*, The MIT Press, 2005. 地域研究の人は一度徹底的にケーススタディの手法を勉強しておいた方がよいと思います。

# 「新しい地域研究」の一〇年へ

——総特集「地域研究方法論」を読んで

末近浩太

## 帰ってきた地域研究方法論

待望の書である。これが評者の最初の感想である。地域研究方法論一般を論じた研究書は、立本成文（一九九九）や高谷好一（二〇〇一）らによる著作、坪内良博編（一九九九）や加藤普章編（二〇〇〇）などが立て続けに刊行された一九九〇年代末から二〇〇〇年代初頭以来、長らく出されてこなかったからである。

この十余年のあいだには、日本における地域研究をとりまく環境も大きく変わった。地域研究を打ち出す学部・大学院がいくつも開設され、二〇〇四年には「地域研究コンソーシアム」が誕生した。また、地域研究分野の公的研究資金も拡大され、二〇〇六年には日本学術会議の分野別委

員会の一つとして「地域研究委員会」が設置された。総じて見れば、教育・研究の現場で地域研究に関わる人びとは増えた。そして、東アジア、東南アジア、南アジア、中東、ユーラシア、アフリカ、ラテンアメリカ等、各地域の名を冠した地域研究の書物やプロジェクトが生まれた。

しかしながら、こうした地域研究の制度化や「盛り上がり」に比べると、地域研究の意義や可能性、方法論一般について真正面から取り組む試みは、（おそらく右記の「地域研究委員会」をのぞけば）皆無であった。ゆえに、「総特集」としてまるまる一冊を「地域研究方法論」に割いた本書は、待望の書なのである。

とはいえ、読後にある種の既視感を持ったことも告白せねばならない。その既視感を自分なりに言葉にしてみる、それは「つかみどころのなさ」と「熱さ」に集約でき

## 新しい地域研究方法論

る。すなわち、地域研究が相変わらず発展途上にあり、それゆえにその方法的探求の必要性和社会的意義や可能性を積極的に語らねばならない、という論調である。こうした論調は、十余年前の立本や高谷らの著作にも共通し、さらにその約一〇年前に出された矢野暢（一九八七）の論考にも同じような印象を抱いたように記憶している。この点は、本特集において油井大三郎氏が「地域研究とは何か」という問いをめぐる議論が「堂どうめぐり」（六七頁）を

続けていると感想しているのと通底するのかもしれない。むろん、仮にそうだとしても、それは本特集の価値を損ねるものではない。むしろ、そうした地域研究が抱えてきた困難を積極的に引き受けようとする姿勢こそが本特集の醍醐味であり、編集責任者であり長年にわたって「地域研究方法論研究会」を組織してきた山本博之氏の意図であるように思われる。そもそも既視感ということは、地域研究の方法論をめぐる諸課題が手つかずのままであることなのである。その意味では、本特集の面白さは、地域研究の方法論一般をめぐる停滞ないしは「地域別分業化」が進むなかで、今一度「地域研究とは何か」という問いに真正面から向き合い、今の時代に相応しい地域研究の意義と可能性をめぐる議論を再活性化させようとする、いわば問題提起の姿勢にあるのではないだろうか。

しい地域研究」を実際にかたちにしていくためには、何らかの道筋を示す必要がある。一〇年前、二〇年前の地域研究方法論がどちらかといえば理念や思想を（時に過剰にまでに）打ち出すことを重視していたとすれば、本特集の画期性はそれらに加えて具体的な研究の道筋を示そうとした点にあるだろう。

それを象徴するのが、総論に続く「現場の悩み三〇問」である。これは「地域研究方法論研究会」での議論を元にテキストに起こしたものであるが、地域研究を志す大学院生や若手研究者（あるいはベテランも）が抱きがちな不安や疑問に対して、一問一答（あるいは二答、三答）で解説していくものとなっている。地域研究をどのように修得し（学び方の問題）、どのように評価され（学説史の問題）、どのようにキャリアパス（所属学会や就職の問題）を設計するのかという極めて実践的な問いと答えが網羅されており、まさしく「地域研究方法論」のタイトルに相応しい内容となっている。

第Ⅱ部は「地域研究の牽引者たちからのメッセージ」と題され、さまざまな地域を専門にする総勢一六名のシニア研究者が第Ⅰ部の内容への応答文を寄せ、それぞれの地域への思いと自分史について語るものとなっている。「書評の書評」となってしまうために個別の内容には詳しく立ち入らないが、やはりというべきか、総じて見れば、第Ⅰ部

本特集は三部構成となっている。順番に見ていこう。

第Ⅰ部「大学院で学ぶ／教える地域研究」は、山本氏による「新しい地域研究」についての総論に始まる。「個性に埋没」するだけの「古い地域研究」に対して、「新しい地域研究」は「ディシプリンを内側から改良・改造しようとする試み」や地域の固有性を「他地域との相関性において理解する語り方」が特徴であるという。だが、評者（がメインフィールドとする中東政治研究）の印象では、ほとんどの地域研究者はこれらの意識を何らかのかたちで共有しているように思われる。それよりも評者が山本氏の「新しい地域研究」に「新しさ」を感じたのは、従来の知の枠組みでは問題関心や分析対象からこぼれ落ちてしまう「想定外」の出来事に対して、地域研究が「伝統的な学問分野の理論と地域（現場）を合わせた形で研究」（二四頁）することができると柔軟さを持っている、との主張である。それは、「アラブの春」や東日本大震災のような「想定外」の出来事が起こった今の時代における地域研究の意義と可能性、そしてそれに関わる地域研究者の役割を提示しようとするものでもある。

だが、言うは易く行は難し、である。このような「新」の「熱い」議論への応答としては内容的に濃淡があり、結果的には地域研究の「つかみどころのなさ」が浮き彫りになっている。だが、少なくとも現時点において地域研究がディサイプル（弟子）に対して体系的に知の伝授を行うディシプリンとなっていないことを考えれば、こうしたオムニバス形式を通して「背中を見て学ぶ」きっかけを提供することは大いに意味がある。さまざまな地域研究者の研究人生における歩みや悩みに触れることで、大学院生や若手研究者は勇気づけられるだろう。

ちなみに、評者も二〇一二年から所属先の大学学部で新設科目の「地域研究論」を担当することとなったが、一年を通してたどり着いたのは、地域研究の意義や可能性を学生に伝えようとするとき、地域研究者の語りを通してその生き様や「作品」に触れ、感じてもらうのが実は一番早道ではないかという暫定的な結論である。

それにしても、地域研究も地域研究者も多様である。月並みではあるが、これが第Ⅲ部「新しい地域研究をめざして」に対するコメントである。それは単に研究対象地域が多様であるというだけではなく、文系と理系、問題設定、方法論、そして地域とのつき合い方など、寄稿者のあいだでばらばらである。しかし、あえてそこに共通するものを見出すならば、それはそれぞれの地域研究者が専門とする地域を足場とした、普遍性への眼差しと苦悩である。地域

の専門家であることや「地域の知」の重要性に揺るぎない自信をにじませながらも、何とかそこからディシプリンの発展や現実社会の問題の解決に向き合おうとする姿勢は、右に述べた山本氏による「新しい地域研究」の理念と通底するものである。その意味では、「新しい地域研究」はすでに萌芽を終え、その花を咲かせつつあるのかもしれない。

### 「自虐史観」を超えて

今日のアカデミアにおいて、地域研究の存在意義を否定する者は少数派であろう。だがその一方で、地域研究の存在意義を真正面から語る者もまた少数派である。地域研究者のあいだでも、個別性に埋没するだけの「古い地域研究」への批判は耳にすることはあっても、「新しい地域研究」ないしは地域研究のあるべき姿を語る声はほとんど聞こえてこない。こうした状況は、地域研究者の数が減っていることを意味するものではなく、むしろその数が増えているにもかかわらず、自らが第一義的に地域研究者であると名乗ることどころか引け目（本特集の言葉を借りれば「自信のなさ」〔六〇頁〕）を感じていることに原因があるのではないだろうか。ディシプリンへの理解や知見を示し、返す刀で地域研究の弱点を批判するだけの「自虐的な」地域研究者（もどき）ばかりが増えているとしたら、それは地域研

究だけではなくディシプリンの発展にとっても不幸なことであろう。

本特集を読んでも、体系化・定式化された地域研究の方法論を知ることができない。また、地域研究の意義と可能性への「熱い」語り思わず「引いてしまふ」読者もいるだろう（実際にそういう声は耳にした）。しかし、真正面から地域研究を語らなければ、地域研究が「つかみどころのなさ」を拭い去り、地域研究者が胸を張って自分の研究を「地域研究である」と言える日も来ない。その意味において、「新しい地域研究」についての問題提起と具体的な道筋の提示を試みた本特集の功績は大きい。次の一〇年は、それぞれの地域研究者次第である、自戒の念を込めて。

#### ●参考文献

- 加藤普章編（二〇〇〇）『新版 エリア・スタディ入門——地域研究の学び方』昭和堂。
- 高谷好一（二〇〇二）『新編「世界単位」から世界を見る——地域研究の視座』京都大学学術出版会。
- 立本成文（一九九九）『地域研究の問題と方法——社会文化生態力学（増補改訂）』京都大学学術出版会。
- 坪内良博編（一九九九）『総合的地域研究』を求めて——東南アジア像を手がかりに』京都大学学術出版会。
- 矢野暢（一九八七）『地域研究と政治学』矢野暢編『講座政治学Ⅳ 地域研究』三嶺書房。

#### ●著者紹介

- ①氏名……末近浩太（すえちか・こうた）。
- ②所属・職名……立命館大学国際関係学部・准教授。
- ③生年・出身地……一九七三年、愛知県。
- ④専門分野・地域……中東地域研究、国際政治学、比較政治学、特にシリアとレバノン。
- ⑤学歴……横浜市立大学文学部（人文課程西洋史専攻）、英国ダーラム大学中東・イスラーム研究センター（CMES）・修士課程（修士・中東政治学）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・五年一貫制博士課程（博士・地域研究）。
- ⑥職歴……日本学術振興会特別研究員PD（三〇歳、二年間）、立命館大学国際関係学部准教授（三二歳）。
- ⑦現地滞在経験……シリア（海外調査・語学留学、二七歳、一年間）。
- ⑧研究方法……現地語原典を読む、現地に行く、ディシプリンを学ぶ、が三本柱。現地では「当たり前」であるが、観察者にとってはそうではない「暗黙知」を拾い上げ、その面白さや学問的な意義をできるだけ多くの人がわかることばと論理で表現すること。
- ⑨所属学会……日本中東学会、日本国際政治学会、日本比較政治学会、日本イスラーム協会。
- ⑩研究上の画期……学部学生ときにレバノンで某イスラーム主義組織に拘束されたとき。彼ら彼女らの「生」に触れることで、それまでの固定観念や謎が一気に解けた。
- ⑪推薦図書……小杉泰『イスラーム世界論』名古屋大学出版会、二〇〇六年。

# 方法論は誰のものか

——木村幹氏と末近浩太氏の批判に答えて

山本博之

編集部から二人の評者の名前を伺ったとき、原稿を読ませていただく前に二つのことが頭に浮かんだ。研究と教育の現場に関することである。

研究の現場については、木村幹さんは韓国、末近浩太さんはシリアとレバノンをそれぞれ主な研究対象としている。どちらも日々のニュースなどを通じて社会の関心が高く、日本との関係を含め、常にリアルタイムの動向分析が期待されている地域である。そのため、学会発表や論文執筆だけでなく、マスメディアを含むさまざまな媒体を通じて研究成果を社会に還元することが期待されている。さらに韓国研究では、日本語で発表してもその内容が相手社会に届きやすいということもあるのではないかと想像する。現実社会における緊張感を絶えず意識しながら研究している立場からはどのような批評をいただくのだろうかと思っ

たり」をしていただき、それを評者自身に補っていただくことで議論が広がっていくのかもしれない。

そのような覚悟と期待をもって原稿を読ませていただいたが、「ないものねだり」に向かうのではなく、つとめて「方法論特集」の内在的な理解に即して批評を寄せてくださった木村さんと末近さんには深く感謝したい。また、時おり見られる厳しい言葉の裏には地域研究のあり方を考えることに対する熱い思いを感じることができ、大変心強く思ったことをまず記しておきたい。

地域研究の方法論は現場の数だけあり、それらをまとめて語ることはできないのだから地域研究の方法論を論じることには意味がないとする考えもあるが、一つ一つの現場の状況に即して地域研究の方法論の探究にまじめに取り組んでいくことが、結果として地域研究に関わる人々の個々の現場の課題の解決にもつながると考えている。それぞれの立場から地域研究の方法論について意見を寄せてくださった二人に感謝した上で、以下では、「方法論特集」が刊行された後に考えたことを含めて紹介しながら筆者の立場を明らかにすることで、特集企画者からの応答に代えさせていただきます。

た。そして、教育の現場に関しては、日常的に学生に接し、指導する学生が論文を書きあげてその後の進路に進むことに責任を負う立場から、大学教育の現場を踏まえた厳しい批評をいただくのではないかと思った。

そのように思った背景には、厳しい批評に対する覚悟とともに、「総特集 地域研究方法論」（以下、「方法論特集」）で十分に扱えなかった部分を補っていただけのではないかという期待もあった。地域研究の方法論は多くの分野にわたり、当然のことながら「方法論特集」で網羅できなかったわけではない。外交の現場で目の前で進行中の事態に対して地域研究者がどのように臨むのか、また、教育の現場で卒業後に研究職に就くと限らない学生たちに地域研究を教えることの意味は何かなど、考えるべきことは多い。「方法論特集」への批評では、評者にあえて「ないものね

## 論文執筆と学会発表の方法論

地域研究の方法論は誰のものか。振り返ってみれば、「方法論特集」は、論文執筆や学会発表を具体的な取り組みとしている大学院生やポスドク研究者に対する呼びかけと、学部学生や実務者のように必ずしも職業研究者になるとは限らない人たちに対する呼びかけとが混在していた点があったかもしれない。「方法論特集」で示した「地域研究の三つの層」で言うならば、第二層（特に右側）で求められる方法論と第三層で求められる方法論の混在である。

地域研究の方法論はなぜ必要なのか。また、それは誰が必要としているのか。大学院での修業を経てこれから本格的に研究業績を出していこうとする大学院博士課程の学生やポスドク研究者の立場では、どうすれば査読に通る論文が書けるか、どうすれば学会で認められる発表ができるか、そしてどうすれば地域研究の専門性を活かした職に就いて生計と社会への貢献を両立できるかなどが切実な問題だろう。この切実な問題への悩みが「方法論がないから」「ディシプリンがないから」という言い方で語られるのはなぜなのか。話を聞いてみると、人類学や政治学や開発学などの特定の学問分野の研究者が多く集まる研究会に参加して、その場の参加者に共有されている言いまわしや研究

者名がわからずに話に十分についていけず、自分の研究発表が十分に受け止めてもらえないと感じたことがきっかけだという人が少なくない。

しかし、木村幹氏が政治学の例で指摘しているように、伝統的な学問的デイシプリンの研究者サークル内ではデイシプリンが意識されていないことも少なくない。やや乱暴な言い方をすれば、その場の言葉遣いに慣れていない新入りがちよっとだけ仲間外れにされた気持ちを抱いたという程度のことなのかもしれない。それを「相手にはデイシプリンがある」「自分にはデイシプリンがない」と考えるのは、事実を反映していないだけでなく、具体的な問題解決にも結びつかない。発表内容を認めてほしい、論文を掲載してほしいと思うのであれば、自分たちで研究者サークルを作り出すのではない限り、ターゲットとする研究者サークルに入って、そこでどのような知識や関心が共有されており、どのような言葉遣いがされているかを観察して身につけるしかない。それはフィールド調査に長けている地域研究者ならきつと難しくはないはずだし、努力すれば複数の研究者サークルの知識・関心や言葉遣いなどの「作法」(デイシプリン)を身につけることもできるかもしれない。こう言うと、地域研究の先達の多くが言う「デイシプリンも身につける」という言葉と重なって聞こえるかもしれない。確かにその方法は、若手研究者が研究発表の場や機

は確かに理にかなっている。しかし、それは自らの研究が確立し、それが地域研究と呼ばれようが呼ばれまいが研究が認められる状況に至ってはじめて可能となる言葉ではないだろうか。また、そのような場や機会を次世代に継承することにについてはどう考えればいいのか。筆者は、その点では学会が果たす役割が大きいのと思っている。それは、古臭い学問の権威を守るのではなく、学術研究を誰もが参入できる開かれた場に置いて批判に曝される状況を作ることが、現場から乖離して誤った方向に向かいかねない学術研究をウォッチしながら発展させる上で大切だと考えるためだ。

これは、地域研究の学会を作るといふ発想につながる。先に「自分たちで研究者サークルを作り出すのではない限り」と書いたのは、個人の努力で実現可能な範囲を超えているものの、あなたがち冗談ではない。地域研究に携わる国内の九〇以上の組織が集まる地域研究コンソーシアム(JCAS)は、そのような試みの一つである。JCASでは毎年秋の年次集会にあわせて一般公開シンポジウムや次世代ワークショップを行っている。また、この文章が掲載される『地域研究』はJCASが編集する学術誌であり、特集企画を中心に誌面が組まれているが、個別の投稿論文も受け付けている。このように、JCASがうまく活用され、既存の学問的デイシプリンにうまくはまらない研究を

会を確保するという意味での問題解決の方法としては有効かもしれない。しかし、学問的デイシプリンごとに「作法」があり、それを超えた形で問題を捉えたいという欲求には十分に応えられない。この欲求に応えるには、それぞれ自分たちで新しい研究者サークルを作り出すか、あるいは学術研究の世界から抜け出して社会に直接語りかける場や機会を見つけるかといった手が必要となる。

## 学会と地域研究コンソーシアム(JCAS)

地域研究のデイシプリンを求める背景に、職業研究者になるために業績をあげたいという若手研究者の切実な状況がある点を突き詰めれば、地域研究の先達が「地域研究という名前にこだわるな」「地域研究にデイシプリンはない」と語ることも理解できなくはない。極端に言えば、学術研究にこだわる必要すらないと言えるかもしれない。自分の研究を発表して十分に評価される場や機会をどこに確保するのか。研究者業界で考えらるならば学会があるし、官公庁や民間企業から研究費が得られるならばその研究プロジェクト内で発表して評価が得られればよいし、研究者業界にとどまらずに新聞・雑誌やテレビで研究内容を一般向けにわかりやすく伝えることも考えられる。大切なのはそこで発表される内容であって方法論ではないという考え方

発表する機会が増えていけば、地域研究の方法論を意識することなく、論文執筆や学会発表がうまくいかないという悩みが解決される人も増えるかもしれない。

## 情報収集力、コミュニケーション力、組織力・実行力

お二人の批評を読ませていただいた率直な感想は、地域研究がすでに制度的に確立しているという印象である。地域研究を志す人はたくさんいるかもしれないが、学部、修士課程、博士課程と進むにつれて自分の関心や適性が明確になってそれぞれの進路を歩むようになり、残った人たちが職業研究者としての地域研究者になるのであって、職業研究者になれば方法論を気にする必要はないという意味で制度的に確立しているということである。これに対して筆者は、職業研究者としての地域研究者になるには研究の方法論を身につけることが不可欠だが、地域研究の方法論とは、職業研究者になるためのものではなく、現在と将来の世界に生きる私たちが、職業や専門性・関心事によらず、誰もが身につける必要があるスキルであり考え方であると考える。

それでは、地域研究の取り組みを方法論として提示しようとした「方法論特集」は誰に向けられたものだったのか



か。あるいは、誰に向けられるべきものだったのか。今になって考えれば、それは学部学生や実務者や異業種・異分野の研究者である。これは、「地域研究の三つの層」で言えば第三層に当たる。

余談になるが、「方法論特集」に京都大学東南アジア研究所で蓄積されてきた地域研究と同じものを感じたという感想を末近氏にいただいたことは、伝統ある東南アジア研究所と同じ敷地で日常的に研究している身としてはたいへん光栄なことだ。ただし、「地域研究の三つの層」に照らして考えるならば、東南アジア研究所が中心になって進められた地域研究が第一層を形作ったのに対し、筆者が所属する地域研究統合情報センターは第三層の方向を目指しており、志の「熱さ」は同じでも方法論上の方向性は同じとは限らないということはおきたい。

話を戻すと、地域研究は具体的な地域を対象とする職業研究者のためだけにあるわけではない。地域研究の基礎にある考え方は、それを十分に身に付ければ、他人とともによりよい暮らしを営むことに寄与しうる。ここで地域研究とは、現地語に通じていることでも特定地域について深い知識を持っていることでもなく、①情報収集・処理能力、②コミュニケーション能力、③組織力・企画力・実行力の三つを組み合わせたものとして捉えられるだろう。これこそ、フィールドでのさまざまな経験で鍛えら

れてきた地域研究者が、その専門性を活かして方法論として教えるべきことではないだろうか。このような方法論は、ある意味では「掴みどころがない」説明にしかならないし、その説明を聞いてもただちに論文が書けるわけではない。木村氏と末近氏が「方法論特集」に抱いた感想は、まさにこのことを適切に読みとってくださいたことの本表裏だと受け止めている。

このように考えれば、ここでいう地域研究の方法論は、大学教育（特に学部教育）で地域研究の授業を担当する大学教員こそが自覚的になるべきということになる。特定の地域の現実の話から語り起こしたとしても、それを世界の珍しい国の話で終わらせず、具体的な実践に結びつけることではじめて意味を持つはずである。必ずしも特定の地域に特別な関心があるわけではない人々にも役に立つと思える地域研究の考え方を追求することは、地域研究のおもしろさや魅力を研究者だけで独占せず、広く社会に役立てていく上でも意義があるものと信じている。

#### ●著者紹介

二二五頁に掲載。